

独占欲の檻に咲く、令嬢の絶頂

～嫉妬に狂った年下
幼馴染からの猛攻～俺の事
好きって言ってましたよね？～Vol.2

【はじめに】

本作はフィクションであり、強引な描写や背徳的な状況を含みます。苦手な方はご注意ください。

年下幼馴染視点の嫉妬目線になります。
男性目線の女性向けエロです。

本文は横書きです。

収録内容

強引な展開、悪態、両片思いエロ、年下攻め、敬語の言葉責め、タメ口、クリ責め、潮吹き、連続絶頂、おしっこ我慢、おもらし、中出し。

人物紹介

蝶野 ゆずりは(ちょうの ゆずりは)

20歳の女子大生。感情が高ぶると関西弁を話す。メスガキ、高飛車お姉様。ツンデレ。かなりの美女。

2つ年下の幼馴染の刻夜に惚れている。

桐生 刻夜(きりゅう ときや)

18歳の大学生。ゆずりはの年下幼馴染。

昔虐めてきたゆずりはに間接的に告白された上に、衝撃な光景を目撃して、怒り狂う。口が悪い。かなりのイケメン。

蝶野 新一(ちょうの しんいち)

ゆずりはの一つ年上の義兄。関西弁。

ゆずりはに無自覚に執着している。かなりのイケメン。

刻夜目線

俺のことを好きと言っていた幼馴染の女が...
。

しかも、同じ大学、同じ専攻科目を取っている
ため、必然的に会う。

しかも、常日頃から話しかけてくるから、今日
も無駄に話しかけてきて、俺は苛立っていた。

良くも普通に話せるな！

ゆずりはからは、別に面と向かって好きと言われたわけではない。

なので、俺が不機嫌な理由が分からないみたいである。

...俺もなんで機嫌が悪いのか、分からない。

「あっち行ってください！」

「は？何？生意気じゃん？こっちは心配してあげてるんだよ？」

いつも上から来るのがムカつく。

2つしか違わないくせに！

俺の家も武術の家系だからか、先輩には敬語で話せと厳しく上下関係をつけられている。

しかし、ゆずりはからは、幼馴染なら、タメ口でもいいけど？と言われていたが、その意図が分からないし、俺はゆずりはには敬語を話していた。

ゆずりはは、たまに訳がわからない事を気にするので、理解できなかった。

普通、年下で後輩にはタメ口で話されると嫌な感じになるのでは？

「ねえ、刻夜君、ここ教えてよ！」

「あ！私が先よ！」

「私が！！」

はあ、また今日も鬱陶しい女が纏わりついてくる。

何なんだコイツらは？そう思って無視しようとするけど、ゆずりはがこっちをジロジロと見ているのに気付いた。

（何見てんだよ？コッチは迷惑してるんだよ。助けてよ。）

ゆずりはも男に呼ばれて、行ってしまう。

今日もアイツは男に囲まれてチャホヤされている。

それを見てなんであんなに生意気な女が？
とムカムカとした気持ちになった。こんなの見
慣れてる筈なのに、なんでだよ？

「ねえ、刻夜君！ 今日うちの家、誰もいないん
だよね？」

「あ！ ちょっと！ 抜け駆け！」

「大学生になったんだからさ、羽目外して、ね
♡」

そういう女を冷めた目で見下ろす。

「...俺そういうの興味ないから。」

そう言って、腕に抱きついて胸を無駄に押し
付けてくる女を引き離した。

何故か彼女達には全く興奮しなかった。

チラリとゆずりはの方を見ると、眉を顰めてこっちを見ている。

そして、俺と目が合うと、ふいっ！とそっぽを向いて、男達と楽しく話し始めた。

何だあれ？意味がわからない。

.....

.....あの時のことを思い出す。

ゆずりはからは、兄が好きとは聞いたことはなくて、いつも喧嘩ばかりしてるとか、弱っちいとか話していた。

コイツマジで口が悪いけど、かなり努力してるのは知ってる。

...俺はなんでこんなに気にしてるんだ？

ゆずりはの方をチラリと見ると、目が合ったので、ドキッとした。

...こいつ、そんなに感じやすいのか？

ジーッとゆずりはの方を見ていると目が合っ
て、何？と聞いてくる。

「...別になんでもありません。」

「...ふーん。」

ゆずりはは、何故かモジモジと俺の方を見てくる。

「...なんですか？」

「...別に。」

そう言ってそっぽ向くのに、こっちをチラチラと見てくる。

...何なんだよ。

...俺のこと好きとか言ってくるし。

.....

ゆずりはとは6歳からの付き合いの幼馴染である。

実際は血の繋がりがあったらしいが、それも何世紀も前の話で、10親等以上離れている。

昔はゆずりはに敵わなくてボロ負けしていたけど、多分今は俺のほうが強い。

でも、それが理解できてないのか、ゆずりはは、まだ自分の方が強いと思っているみたいだった。

「刻夜は私の後ろに隠れてればいいからね！」

いつの時代の話をしてんだ？このバカ女！！

もうお前よりも強いんだよ！！

「あ、新一！」

何故か義理の兄のことをゆずりはは名前で呼ぶ。

この前の二人のやり取りが思い出される。

そして、最後に、ゆずりはが、刻夜！！と俺の名前を呼んでいたのを今も猛烈に覚えている。

このクソ女！！あんなの見せられて、俺の名前を呼ばれたら忘れられるわけねえだろ！

（くそ！なんかめっちゃイライラする！）

ゆずりはが彼女の義兄と話しているのを見るのが耐えられなかった。

「刻夜！何処にいくの？」

最高にイライラしていた時に、俺の気持ちも知らずにこの馬鹿女は何も知らないみたいな顔で話しかけてきた。

黒い感情が俺の中で渦巻く。

元からコイツには恨みと執着心があった。

...コイツを滅茶苦茶にしてやりたい！という気持ちが大きくなっていく。

そして、ゆずりはが俺から離れようとした瞬間に、彼女の腕を掴んだ。

...もう逃さない！！

コイツは最初から俺の物だったのに！！

「え？きゅ、急に何？」

誰もいない部屋に連れ込んで押し倒した。

「へ？え？！な、何、い、いや！」

抵抗しようとする手を押さえつける。必死に逃げようとするのに、今は俺のほうが強いから逃げられない。

ほら、もう俺のほうが強いんだから、お前は大人しく俺に良いようにされてろよ！

「...アンタは俺のことどう思ってるんですか？」

「へ？え？...いや、別にどうとも思っていないけど。」

モゴモゴと歯切れ悪く答える。

「...俺のこと、好きなんですか？」

好きって素直に言えよ！バッチリ聞いてたんだからな！

「...す、好きじゃないし！！」

ツーンと顔を赤らめてそっぽ向く。

「...嘘つかないで下さい。俺のこと好きなくせに。」

「だから、好きじゃないってば！」

顔を赤らめたまま、怒るのに、チラチラとこっちを見てくる。

「ちょっと刻夜なんか変だよ？どうしたの？なんか悩んでるの？」

「あんたの事で物凄く悩んでいます。アンタが素直に認めたら解決すると思いますけど？」

急に黙り込むゆずりは。
俺はゆずりはが話し始めるまで待ったが、いつまでも何も言わずに沈黙だけが落ちる。

イライラして、彼女の胸を揉んだ。

「ひっ！？な、何を！！」

「体に聞いたほうが早そうだと思っただけです。」

軽く抵抗されたが押さえつけた。

ゆずりはから香る女の子の清潔感のあるいい匂いが漂ってくる。
その中に女の甘い誘うような匂いが鼻に付く。

その匂いに包まれると男の本能が揺さぶられる。

「こ、こんな事して、絶対に許されないんだからね！！」

「そんなのどうでも良いですよ。アンタはただ、感じてればいいんです。」

俺の物だという印を鎖骨に残していく。

肌をじゅっ！と強く吸うと、ビクッ！と震えて、カタカタと体を震わせる。

そんなに怖がるなよ。俺が悪い事してるみたいだろ？

...本当に俺のこと好きなのか？なんか不安になってきた。

「好きって言ってください。」

じゃないと俺が無理矢理してるみたいに思える。

「はあ！好きじゃないって！」

無視して、ブラジャーを押し上げて、胸を直に揉む。

全然抵抗されない。でも、恥ずかしそうにはしている。

「こ、これは、私の意思じゃないから！無理矢理だもん！あ、アンタなんかなんとも思っていないし！」

いや、アンタ何食われそうになってるのに別のことに気にしてんだ？
相変わらず読めない奴だ。

胸は最初から何故かビンビンに勃起していた。

「何尖らせてるんですか？」

胸の先には触らないように、周りをくるくると
擦るように刺激する。

「さ、最低！と、年下のくせに！」

...年下とか関係ないだろ？何だよ？年上の方
がいいのか？

...義兄に開発されて？とか考えてしまって、
ムカツとして、首を横に振った。

「ふーん、年上がいいんですか？
でも、年下の俺が少し触っただけでも濡れて
ますけどね？？」

耳元で囁いて、スカートに手を入れて下着を
横にずらし、割れ目を開く。

ヌルヌルと蜜を指に纏わせて、これアンタが濡れてる証拠だからと見せつけてやると、体をふるふると震わせて、恥ずかしそうにこっちを見てくるのをジーツと見つめる。

「このクソガキ！」

と今度は俺の耳元で、吐息を乗せて侮辱の言葉を囁かれて、ドクンと胸が弾む。

...屈服させがいがあるなあと、笑みを深める。

...ゆずりはは、相変わらず、口が悪くて、生意気なお姉様だった。

昔からそのプライドの高さは変わらない。

「...へえ、そうですか？なら、ここもいいって事ですよ？」

続きは製品版にて！

クリ責め連続絶頂になります！